エディット・シュタインの手紙をめぐる論争の射程

木　鎌　耕一郎

目　次

はじめに
1. 「教会の沈黙」とエディット・シュタイン列聖問題
　1-1. 教会の政治的影響力
　1-2. 「教会の沈黙」に関する教皇庁文書
　1-3. 文書公布のタイミング
2. 公開された手紙をめぐる論争
　2-1. 手紙の位置づけ
　2-2. 家族の見方
　2-3. 手紙公開後の論争
3. エディット・シュタインにおけるユダヤ人問題解決の本質
　3-1. 見逃された視点
　3-2. 召命への三段階の光
　3-3. ユダヤ人問題の解決とカルメルへの道
むすび

はじめに

ユダヤ系ドイツ人エディット・シュタイン(1891〜1942年)は，フッサールの下で現象学を学んだ哲学者，女性論者，カルメル会修道女として知られている。ドイツで女性初の哲学博士号を取得し，ナチス政権下によるユダヤ人迫害の潮流に揉まれながらも，多数の著書，論考，翻訳書を遺した。彼女は1942年8月，アウシュビッツのガス室で亡くなった。カトリック教会は，エディット・シュタインを1987年5月に列福し，1998年10月に列聖した。ユダヤ人が列聖されたのは，初期教会時代の聖人を除けば初めてであった。この件をめぐりユダヤ教側から多くの抗議が寄せられた。ユダヤ教諸団体からの抗議は，当初，カトリック教会の改宗主義に対する不信感に由来するものが多く見られたが，エディット・シュタインを列福・列聖した当時の教皇ヨハネ・パウロ二世や，欧米諸国の司教団は，これらの問題に複数の声明を以てカトリック側の理解を示し，両宗教の相互理解が促進された。議論の主要なテーマは，エディット・シュタインの「殉教」の意味と，「ユダヤ人のアイデンティティ」に関する両宗教間の理解に集約していった[1]。

この件を契機とする両宗教間の対話は，1980年代末から始まり，列聖された1998年以降の数年をピークに諸所で行われたが，その後，2003年2月13日に，教皇庁がそれまで未公開であっ

八戸大学ビジネス学部

[1] エディット・シュタインの列福・列聖をめぐるカトリックとユダヤ教の対話の経緯や意義については，拙稿「エディット・シュタイン列聖問題の行方―アメリカの反響をめぐって」『比較文化研究』No. 54 日本比較文化学会 2001年 (pp. 23-32)を参照。

たエディット・シュタインの手紙を公開[2]したことから，カトリックとユダヤ教の論者の間で新たな論争が展開された。この論争は列福・列聖時に見られた対話の広がりや注目度に比べれば小規模ではあるが，エディット・シュタインをめぐる両宗教間の対話の論点を整理する上で重要な示唆を含んでいると考えられる。本研究は，この新しい契機によって引き起こされたカトリックとユダヤ教の論争をめぐる問題に光をあてることによって，これまでの研究を発展させるという位置づけにある。

筆者はこれまでの研究から，エディット・シュタインをめぐる両宗教間の議論においては，歴史上カトリック教会が有していた政治的影響力やその実践にかかわる政策上の問題が常に引き合いに出され，そのことが時に議論の焦点を曖昧にするとともに，深まりかけた議論を振り出し地点へと連れ戻してしまうような印象を抱いている。過去の政治的問題への内省は，カトリックとユダヤ教との関わり一般において避けて通ることのできない重要な課題であるとともに，エディット・シュタインの列福，列聖をめぐるカトリックとユダヤ教の対話の大枠と件の手紙に端を発する論争において共通して見出される議論の射程である。しかし既に一定の期間が経過しているエディット・シュタインをめぐる対話において議論をそのような射程に限定することは，対話が新しい段階に進む妨げになると思われる。このような問題意識のもと本稿では，手紙公開に端を発する論争において，カトリックとユダヤ教の双方が陥っている議論が，本来，対話と相互理解の道を開く可能性を秘めているエディット・シュタイン自身の意図とは異なる次元において展開されているという見通しに立ち，公開された手紙をめぐる論争の具体的展開と手紙を記した時期のエディット・シュタイン自身の論述を検証する。

[2]　公開された手紙の解説・邦訳として，拙稿「エディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙」『八戸大学紀要』第28号（2004.3）を参照。

1.「教会の沈黙」とエディット・シュタイン列聖問題

1-1.　教会の政治的影響力

エディット・シュタインが列福，列聖された際，ユダヤ教側から挙げられた抗議や疑念の根底には，言うまでもなく，長きにわたりユダヤ人がキリスト教社会において被ってきた差別と迫害の記憶がある。とりわけ第二次大戦中にドイツとその占領国を中心に展開されたユダヤ人に対する大虐殺ホロコーストの記憶は，あらゆる場面で振り返られている。カトリック教会との関係においては，戦後書かれた戯曲『神の代理人』[3] の影響もあり，時の教皇ピオ十二世がナチスの蛮行に有効な政治的手段を講じなかったとするいわゆる「教会の沈黙」に対する非難が繰り返されている。

他方でカトリック教会は，戦後，第二バチカン公会議（1962～1965年）を開催し，キリスト教以外の諸宗教に対する排他的態度を改め，相互理解を深めようとする姿勢へと方向転換を図った。ユダヤ教との関係については『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』，通称 *Nostra Aetate* の第4項に記されている。バチカンは *Nostra Aetate* の精神の具現化に向けて1974年に「ユダヤ教との宗教的関係のための委員会」を設置している。これによりユダヤ教に関わる公的な対応が組織的，制度的なものとなった。同委員会は，1975年に『公会議の宣言 *Nostra Aetate* 第4項を応用するための指針と提案』，1985年に『カトリック教会の説教と教理においてユダヤ人とユダヤ教を正しく表現するための覚書』などの文書を公布している。

とりわけ1978年に教皇に選出されたヨハネ・パウロ二世は，それまで以上にユダヤ教との様々なレベルでの関係改善に取り組んでい

[3]　ロルフ・ホーホフート著／森川俊夫訳 『神の代理人』白水社1973年

る[4]。ヨハネ・パウロ二世は，よく知られているように，東西冷戦の崩壊をはじめ二十世紀の重要な国際政治の場面で政治的に影響力のある諸言動を展開してきた[5]。イスラエル共和国とバチカン市国との国交正常化についても，1992 年に合同委員会を設置し，二年後の 1994 年には国交正常関係を正式に樹立させた。イスラエルとの外交関係という実際的な政治問題は，ユダヤ教との宗教的な関係改善のために避けることができない懸案であった。

本来，教皇の政治的発言や行動は，バチカン市国という国家の元首のものとしてよりは，世界中のカトリック信徒の代表としての性格を持つため，基本的には宗教的な次元に立脚している。しかしながら，その政治的影響力は決して小さくない。ヨハネ・パウロ二世の業績は，そのことを明確に示していると言える。歴史的に見ても，キリスト教世界における諸々の政治的問題に対して，人々が教皇権威に何らかの影響力の行使を期待することは，決して不自然ではなかった。だからこそ，第二次大戦中のナチスによるユダヤ人迫害政策に対して，カトリック教会が積極的に反対の姿勢を示さなかったとする非難，すなわち，政治的行動が求められていた時に教会がそれを怠ったとの非難が，ユダヤ人社会の間で繰り返されるのである。

1-2. 「教会の沈黙」に関する教皇庁文書

ホロコーストに関するカトリック教会の政治的影響に関しては，1998 年 3 月 16 日に教皇庁が発表した『私たちは忘れない —— ショアーについての反省』という文書が，現代の教会による歴史解釈の立場を明らかにしている点で極めて重要である。

この文書は，「ユダヤ教との宗教的関係のための委員会」が作成し，前文に委員長のエドワード・イドリス・キャシディ枢機卿に対するヨハネ・パウロ二世の挨拶が添えられている。その内容は，ユダヤ人とキリスト教徒の関係について確認し，ショアーの原因についてのカトリック教会の認識を示した上で，両宗教が共通の未来をともに構築することを提唱している。そして過去のユダヤ人への迫害，とくにナチスによるユダヤ人の大虐殺の悲劇を忘れてはならず，「記憶」する義務をキリスト教徒が負っていることを呼びかけている。さらにこの文書は，過去にキリスト教諸国で繰り広げられたユダヤ人迫害や蔑視に対してキリスト教徒もその責任を担っていることを直視し，公式な謝罪を示すものであった。同時に，この文書は，キリスト教の第三千年紀を機に，これまでのキリスト教徒の罪を認めて謝罪し和解を求める『記憶と和解 —— 教会と過去の種々の過失』[6] という教皇庁国際神学委員会による文書の公布を間近に控え，「ほかのだれよりも教会は，ユダヤ民族との精神的近親関係がきわめて密接な絆のゆえに」，特別に重要視した形で表明したものである[7]。

この文書では，二千年来のキリスト教国におけるユダヤ民族の境遇を，次のように分析している。まず，キリスト教徒が過去において，しばしばユダヤ人を差別し，虐殺した理由として，ユダヤ民族に関する新約聖書の誤った解釈の影響が，キリスト教世界において一般化した歴史を挙げている。すなわち，誤った聖書解釈という「宗教的次元」の要因が反ユダヤ主義の社会的風潮を生み，18 世紀の終わりまで，ユダヤ人

[4] 宮平　宏・藤谷　健『ローマ法王—世界を駆けるヨハネ・パウロ 2 世』（岩波ブックレット No. 537）岩波書店 2001 年，「ローマ法王ヨハネ・パウロ 2 世の実像」制作 WGBH ヘレン・ホイットニープロダクション（アメリカ 1999 年）などを参照。

[5] 竹下節子『ローマ法王』ちくま新書 1998 年 pp. 137-178.

[6] 邦訳は教皇庁国際神学委員会『記憶と和解 教会と過去の種々の過失』（東門陽二郎訳）日本カトリック中央協議会，2002 年

[7] 和田幹男「キリスト教とユダヤ教の対話の歩み —第 2 ヴァチカン公会議から 20 世紀の終幕まで—」『人間文化第 3 巻』英知大学人文科学研究室，2003 年 3 月 pp. 161-175 所収の同文書の邦訳，同書 pp. 51-71 の解説を参照した。また同氏の Web サイト（http://mikio.wada.catholic.ne.jp）には訳が紹介されている。

への迫害やゲットーでの隔離が行われたとされる。一方19世紀には，多くの国で民族主義がおこり，それに伴う社会的変化がユダヤ人をヨーロッパの諸地域で異分子として捉える風潮の原因になった。すなわち19世紀のユダヤ人迫害は，「本質的に宗教的というよりは社会的，政治的なもの」と分析している。20世紀のショアーについては，より細かな分析を施している。民族主義の高揚は，20世紀になってから，ドイツの国家社会主義を生み出した。この国家社会主義は，アーリア民族の優秀性と他の諸民族の劣等性という差別の図式を描いた。第一次大戦後のドイツ国内の問題解決と国民の自尊心の再構築の方法として，多くのドイツ人もこれに協力的であった。こうしてユダヤ人への迫害は，国家や民族を神格化する国家社会主義というイデオロギーによって推進された。したがって，ショアーの直接的原因はこのような「政治的次元」に根を持ち，キリスト教とは別の次元に属するとされる。このことを説明するに当たり，本文書では，「反ユダヤ主義」と「反セム主義」という用語を使い分けている。

このように人類が一つであり，すべての民族と国民が同等の尊厳性をもつとの教会の変わらぬ教えとは対立する学説に基づく反セム主義（Anti-Semitism）と，キリスト教徒も有罪とされる不信と敵意の古くからの感情である反ユダヤ主義（Anti-Judaism）との間には違いがあり，わたしたちはこれを無視することはできません。…中略…ショアーはまったく現代的な新異教的政権の仕業だったのです。反セム主義はキリスト教の外にその根を持ち，その目標を達成するためには躊躇することなく教会に立ち向かい，教会の信徒たちに対する迫害も行ったのでした。

しかし，このナチスによるユダヤ人迫害は，キリスト教徒の頭と心の中に埋め込まれた反ユダヤ主義の偏見によっていっそう容易になったのではないかと問うことができましょう。国家社会主義が政権を掌握して始めたユダヤ人迫害に対して，キリスト教徒の中にあった反ユダヤ的な感情がキリスト教徒を鈍感にし，あるいは無関心にさえしたのではないでしょうか。[8]

ここではユダヤ人に対する迫害の要因を「宗教的次元」と「政治的次元」という二つに分けている。すなわち，ユダヤ人迫害の要因として「反ユダヤ主義」（Anti-Judaism）という，キリスト教徒の偏見に基づく「宗教的次元」の要因と，「反セム主義」（Anti-Semitism）という国家社会主義のイデオロギーに基づく「政治的次元」の要因に分けて分析している。第二次大戦中のドイツにおけるユダヤ人迫害であるショアーについては，その「直接的原因」を政治的次元に基づくものとし，それをカトリック教会は強く非難する姿勢をとる。カトリック教会がその罪を認め謝罪しているのは「直接的原因」ではなく，宗教的次元に基づく要因，すなわち誤った聖書解釈による反ユダヤ主義的な感情によって政治的イデオロギーの拡大を助けたという，「間接的原因」に対してである。さらに，このように国家社会主義の非人道的政策に反対せず，無関心でいたキリスト教徒の存在を認め，謝罪すると同時に，ナチスによるユダヤ人迫害に立ち向かったキリスト教徒もいたことを示し，彼らを賞賛している。その中には，ユダヤ人社会から非難の的となっている，時の教皇ピオ十二世も含まれている。

以上見たように，この教皇庁文書の分析は明快であり，過去のユダヤ人迫害に関するキリスト教徒の罪を認め，悔い改めを表明していると理解することができる。しかし，ユダヤ人社会が大戦中，カトリック教会の権威に求めていたのは，ナチスのユダヤ人迫害を阻止するために有効な，教皇権による政治的働きかけであった。その点，本文書は，カトリック教会が当時，具

[8] 同上

体的な政治的働きかけを為したか否かについては，基本的に触れていない。無論，そもそもバチカンの「本務」は政治的活動ではなく，純粋に宗教的次元に限定されることも確かである。その意味では，ショアーのひとつの要因として，キリスト教徒の内面に誤った「反ユダヤ主義」の感情が巣食っていたことを認め，「宗教的次元」における悔い改めを表明することこそ，この公文書における本来の狙いであり，それ以上のものではない。通常の国家とは大きく事情を異にするバチカンにとっては，何らかの政治的行動が為されたか否かは，副次的な問題であるとの立場を表明したものと解することもできる[9]。

1-3. 文書公布のタイミング

教皇庁文書『私たちは忘れない —— ショアーについての反省』は，戦後繰り返されているユダヤ人社会からの非難に関わる教会の見方が表れている点で重要である。前述のようにこの文書は，キリスト教徒とユダヤ教徒との「密接な絆」を重視し，2000 年 3 月 7 日に公布された『記憶と和解 —— 教会と過去の種々の過失』から二年前倒しして 1998 年 3 月 16 日に公布された。この公布の時期は，エディット・シュタインの列聖式が執り行われた 1998 年 10 月 11 日の約七ケ月にあたる。エディット・シュタインの列福，列聖に至る時間軸[10] にこの文書の公布を重ね合わせてみると興味深いつながりを読みとることができる。

1962 年にケルンの大司教ヨゼフ・フリンクス枢機卿がエディット・シュタインの「列福」のための一般的調査を開始してから 25 年を経た 1987 年，エディット・シュタインは福者の列に加えられた。この際，「殉教者」としての列福であった点がユダヤ教側から抗議を招く結果となった[11]。ケルンで執り行われた列福式のミサの説教でヨハネ・パウロ二世は，彼女が「殉教者」であることを，次のように理由づけている。

> エディット・シュタインは殉教の民の娘として，アウシュビッツ強制収容所で殺されました。彼女はケルンからエヒトにあるオランダのカルメル会に移ったものの，ユダヤ人迫害の拡大から逃れることが出来たのは，ほんの束の間でした。ナチスがオランダを占領した後，ユダヤ人殲滅政策はそこでも早々に実行されたのです。当初，キリスト教に改宗したユダヤ人だけは，見逃されていました。ところが，オランダのカトリック司教団が，ユダヤ人迫害に対する鋭い抗議の意を表明する内容の教書を公にしたため，ナチスの党首たちは，その報復として，カトリックのユダヤ人も殲滅させることを命じたのです。このことが原因で，十字架のテレジア・ベネディクタ修道女は，エヒトのカルメル会修道女たちと避難場所を捜していた姉のローザとともに，受難に遭い，殉教者となりました。[12]

この「殉教者であることの理由」は，ユダヤ

[9] 「ショアー文書」に対する反響としては，カトリック側とユダヤ教側からのコメントとエドワード I・キャシディ枢機卿の声明が編纂された *The Holocaust Never to be Forgotten : Reflections on the Holy See's Document We Remember*, edited by Helga Croner, A Stimulus Book, 2001 が挙げられる。

[10] エディット・シュタインの列福，列聖に至るまでの経緯については，「エディット・シュタインとユダヤ人問題 —— 列聖への歩み」『キリスト教文化研究所年報 No. XX』ノートルダム聖心女子大学キリスト教文化研究所，1998 年 pp. 243-272. 及び「エディット・シュタインの "Unterwegs ad orientem" に関する一考察」『カトリック研究 71 号』上智大学神学会，2002 年 pp. 119-147. に詳しい。日付や事項の詳細は，マリヤ・アマータ・ナイヤー前掲書，p. 82 の年表による。

[11] 須沢氏によれば，ケルンのカルメル会のアマータ・ナイヤー修道女は，エディットが殉教者とみなされる場合，同じ時に逮捕され殺された犠牲者たちの代表として，「エディット・シュタインとその仲間の殉教者」というタイトルが相応しいと望んだが，その望みは受け入れられなかったという。前掲「エディット・シュタインとユダヤ人問題—列聖への歩み—」p. 254 を参照。

[12] Pope John Paul II, "Homily at Beatification Eucharist." Edited by John Sullivan, *op. cit.* (*L'Osservatore Romano*, Weekly Edition in English, no. 20, May 18, 1987, 19-20.)

教徒から次のような論理で非難された。オランダ司教団の声明へのナチスの報復はエディット・シュタインが他の多くのユダヤ人とともに連行された引き金に過ぎず，彼女が殺された根源的な理由は彼女が「ユダヤ人であった」ことにある。したがってエディット・シュタインを「キリスト教の殉教者」と見なすことは誤りである。この論理の根底には，ナチス・ドイツの犠牲者の側にキリスト教徒を位置づけることに対する拒絶がある。カトリック教会は当時の反ユダヤ主義政策に沈黙し加害者の側に与していたとの思いがある[13]。

列福の次の段階である列聖の実現のためには一つの奇跡が必要であった。その奇跡は，エディット・シュタインが列福された1987年に，アメリカ合衆国のある少女の身の上に起こった[14]。この奇跡がエディット・シュタインの執り成しによるものであることが認定されたのは，1997年4月である。当初エディット・シュタインの列聖式は，奇跡が認定された翌月，ヨハネ・パウロ二世が母国ポーランドを訪問した折に執り行われる手はずであった。しかしこのとき，ポーランド系のユダヤ人団体から，エディット・シュタイン列聖に対する抗議が起こった。その抗議は，エディット・シュタインが「殉教者」であることと深く関わっていた。ヨハネ・パウロ二世はこの異議を重視し，その地でのエディット・シュタインの列聖式は内密のうちに中止されたという。エディット・シュタインの列聖式が執り行われたのは，翌年の1998年10月11日，バチカンにおいてであった[15]。

福者，聖人の認定は，カトリック教会にとって宣教的，司牧的な意味だけでなく，外交的，政治的な意味を帯びていることは少なくない[16]。ユダヤ教との関係改善に熱意を有していたヨハネ・パウロ二世にとって，エディット・シュタインの列福，列聖が重要な意味を持っていたことは確かである。当時のバチカンは，ポーランドでのエディット・シュタインの列聖式の実現に障害となったユダヤ人からの抗議に対応し，何らかの目に見える実際的な対策を講じる必要があった。このことから，教皇庁文書『私たちは忘れない ―― ショアーについての内省』が1998年3月に公布された理由を，次のように解釈することが可能である。エディット・シュタインの列聖式が1998年10月にバチカンで，キリスト教徒だけでなくユダヤ教徒にも十分理解され，疑念ではなく祝福に満たされた雰囲気のもと執り行われるために，バチカンはユダヤ教徒からの抗議に実際的な対応をした。それは教皇庁文書を通して，ユダヤ教徒の抗議の根底に存在する第二次大戦中のホロコーストの「教会の沈黙」とキリスト教社会における反ユダヤ主義の根源に対する教会の立場を表明し，キリスト教に非があると考えられる点についてあらかじめ謝罪を行うという行為である。

教皇庁文書『私たちは忘れない ―― ショアーについての内省』公布のタイミングをエディット・シュタイン列福，列聖をめぐる80年代から90年代の動向に重ね合わせると，同文書とエディット・シュタイン列聖問題とが密接な関係にあったという解釈が成り立つ。この解釈の正

[13] エディット・シュタインが，どのような意味で殉教者でありえたか，について，須沢かおり前掲論文「エディット・シュタインの “Unterwegs ad orientem” に関する一考察」では，最新の調査をもとに，エディット・シュタインの深い「内面」に対する新しい洞察が示されている。

[14] この奇跡の概要および調査の詳細については，Kieran Kavanaugh, OCD, “The Canonization Miracle And Its Investigation.” *Never Forget : Christian and Jewish Perspectives on Edith Stein*. Edited by Waltraud Harbstrith, OCD. Translated by Susanne Batzdorff. Washington, DC : ICS Publications, 1998. を参照。

[15] 須沢氏は列聖式の日付10月11日は，エディット・シュタインの生まれた1891年10月12日がユダヤ教の祝日「贖罪の日」であったことと無関係ではないと見ている。前掲「エディット・シュタインとユダヤ人問題―列聖への歩み―」p. 259を参照。

[16] 竹下節子『聖者の宇宙』青土社 pp. 151-156. を参照。

年　月	関係事項	
1986年4月16日	ヨハネ・パウロ二世、ユダヤ教会堂訪問	
1987年5月1日	エディット・シュタイン列福（ケルン）	殉教者としての認定に対するユダヤ教側からの抗議
1997年4月	奇跡の認定	5月　ユダヤ教団体の抗議により、ポーランドでの列福式中止
1998年10月11日	エディット・シュタイン列聖（バチカン）	3月16日　『私たちは忘れない―ショアーについての反省』
2000年3月7日	『記憶と和解――教会と過去の種々の過失』	

図1　列福・列聖時期前後のカトリック-ユダヤ教関係事項

否は明らかではないが，少なくとも，この歴史的文書の公布と列聖式が同じ年にタイムリーに行われたことで，エディット・シュタイン列聖をめぐる両宗教間の議論の射程にカトリック教会における過去の政治的問題に関わるテーマが不可分のテーマとして位置づけられてしまったような印象は否めない。実際に，次章で見るように，2003年2月13日に公開されたエディット・シュタインの手紙をめぐる新しい論争における両宗教の論者の言説には，その影響が色濃く見られるのである。

2.　公開された手紙をめぐる論争

2-1.　手紙の位置づけ

2003年に教皇庁が公開したエディット・シュタインの手紙は，公開前からその存在は知られていた。この手紙は1933年春にエディット・シュタインが，時の教皇ピオ十一世（在位1922～1939年）に宛てて送った手紙である。エディット・シュタインの『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』[17] の記述には，手紙の内容が当時のドイツ国内におけるユダヤ人迫害の惨状を教皇に報告しユダヤ人問題の解決のために回勅の公布を嘆願するものであったことが示唆されている。当初エディット・シュタインは，ドイツにおけるユダヤ人迫害が激化する中にあって，教皇ピオ十一世と謁見し回勅を交付してもらうよう直に嘆願しようと考えていたが，結果的に手紙という形で彼女の願いは教皇に届けられた。エディット・シュタインは，1928年以来，毎年，ボイロンにあるベネディクト修道院で聖週間と復活祭を過ごしている。1933年の春もボイロンを訪れたが，この年の訪問で彼女は，自分の指導司祭であるベネディクト修道会のラファエル・ヴァルツァー大修道院長に，教皇への嘆願について相談し，指示を仰ごうと考えていたのである[18]。エディット・シュタインのユダヤ人問題への思いを告げられたラファエル・ヴァルツァー大修道院長は，その年が聖年にあたり，ローマに巡礼者が多数訪れるため，私的謁見が困難であると判断した。

[17] 『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』は，コンラッド・ド・メーテル，エディット・シュタイン／福岡カルメル会・西宮カルメル会訳『エディット・シュタイン 小伝と手記』女子パウロ会 1999年の90-124頁に，西宮カルメル会訳で収められている。

[18] 前掲のコンラッド・ド・メーステル／エディット・シュタイン『エディット・シュタイン 小伝と手記』所収の西宮カルメル会訳『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』pp. 94-95を参照。

そこで，エディット・シュタインは方法を変え，自らの思いを教皇に嘆願する「手紙」を記し，ラファエル大修道院長を通して教皇へ送付した。ドイツでヒトラーが首相に就任したのが1933年1月30日であるから，同年春に書かれたこの手紙は，ドイツ国内で急激に推し進められたユダヤ人に対する迫害を時期的にいち早く教皇に伝えたことになる。

この1933年にバチカンは，ドイツとの間に政教条約（Concordat）を締結した。この締結の実現に尽力したのは当時のバチカン国務大臣パチェリ枢機卿，後の教皇ピオ十二世（在位1939～58年）である。政教条約の目的は，ドイツ国内の教会とカトリック信者の宗教的活動の保障と擁護であるが，政治的には当時のロシアのスターリンによる共産主義体制の拡張を抑える目的もあった[19]。この政教条約の締結は，戦後のユダヤ人社会で非難の的となった。ユダヤ人にとって政教条約は，「政治的」の二次的な意味，すなわち，ある種の抜け目なさや条件付きの行動を意味するものと映ったからである。他方で，1937年にピオ十一世は *Mit Brennender Sorge*（燃えるような憂慮を持って）という回勅を公布している。これはナチスが政教条約をしばしば違反したことから，これを強く非難するために公布されたとカトリック教会では理解されている[20]。

いわゆる「教会の沈黙」への非難には，この1933年の政教条約と1937年の回勅 *Mit brennender Sorge* の存在が深くかかわっている。同時期にピオ十一世のもとに届けられたエディット・シュタインの手紙の存在は，時間的にも内容的にも「教会の沈黙」にまつわる諸問題とのつがなりのもとに理解される位置づけにあるといえる。換言すれば，エディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙は，「教会の沈黙」を非難する立場からは「聞き入れられなかった嘆願」として理解され，当時の教会の姿勢を擁護する立場からは「回勅 *Mit brennender Sorge* の公布を促した嘆願」として理解される傾向が見られるのである。

2-2.　家族の見方

戦時中の教会の姿勢への批判とエディット・シュタインの手紙を結びつける立場として，エディット・シュタインの家族の見方はその典型である。エディット・シュタインの姪に当たるスザンヌ・バッツドルフは，ナチスのユダヤ人迫害が激しさを増した1939年に家族とともに合衆国に亡命した人物である。本節では，彼女のエディット・シュタインの手紙に対する考え方を手紙公開以前の見解をもとに見てみよう。

スザンヌ・バッツドルフは自身の編集による『エディット・シュタイン選集』所収の「アウシュビッツの殉教者」（1987年4月12日に *New York Times Magazine* 誌に掲載された記事の再録）という文章の中で，この手紙について次のように記している。

> 私の叔母が，自分のユダヤ人仲間を見捨てたと感じていなかったということは，修道院に入る前に，彼女がピオ十一世にドイツの国家社会主義政府の反ユダヤ政策の罪を告発する回勅を出してもらうように懇請の手紙を書き送ったことで明らかである。彼女自身におけるカトリックとユダヤ教との結びつきや，カトリックの大学研究者と仲間関係にあるというポジションを利用して，自ら仲介者となり，道義に訴える進言を通して，劇的な変化をもたらすことを希望していたのである。その彼女の大胆な行動は，確かに，彼女がまだ，ユダヤ人の家族と遺産に忠義をもっていたことを証しするものである。1938年10月に書

[19]　マシュー・バンソン／長崎恵子・長崎麻子訳『ローマ教皇事典』pp. 190-194，及び pp. 295-297.

[20]　この回勅はドイツへ密かに持ち込まれすべての教会で読み上げられたという（上掲『ローマ教皇事典』p. 191）。一般的にこの回勅は，予想を超えたナチスの蛮行に対する教会の対応とされるが，エディット・シュタインの嘆願に応えたものとの見方（『カトリック生活』2003年5月号，ドン・ボスコ社 p. 40）も存在する。

かれたウルスラ会修道院長への手紙で，彼女は次のように語った。「私はエステル王妃のことを何度も繰り返し考えないわけにはいきません。彼女は，自分の民のために王の前に立つというはっきりとした目的のために，自分の民の中から連れ出されました。私はとても貧しく頼りない小さなエステルですが，私を選ばれた王は，無限に偉大で慈悲ぶかいお方です」。教皇の共鳴を得ようという彼女の試みの失敗は，痛々しい失望だったはずだ。[21]

スザンヌ・バッツドルフにとってこの手紙は，叔母がユダヤ教信仰を離れてカトリックに改宗した後も，ユダヤ教との結びつきを忘れるどころかむしろ自らユダヤ人であることを痛烈に意識し同胞が置かれた不条理な状況に強い痛みを覚えていたことの明確な証しである。同様の趣旨は，1999年に，スザンヌ・バッツドルフがカトリック系の雑誌 *America* 誌において，列聖式に参加したことについて報告している記事の中でも言及されている。彼女はこの手紙が，「私が知るかぎり，バチカンの封印された諸記録の中にまだうもれている」と断った上で，回勅の公布を求めようとしたエディット・シュタインの行為を次のように評価している。

エディット・シュタインの手紙であろうと，他の誰か，より著名な人物の議論であろうと，反ユダヤ主義を非難する回勅を発布するように教皇ピオ十一世を駆りたてることはなかったであろう。しばしば言われることであるが，1937年に公にされた彼の回勅 *Mit Brennender Sorge* は，エディット・シュタインの嘆願への回答であったという。しかしながら，この文書は，彼女が手紙を書いてから四年経つまで発布されず，ユダヤ人についての言及もないのである。[22]

スザンヌ・バッツドルフの見解に見られるように，ユダヤ人との連帯意識を持って行動したエディット・シュタインの試みは，同胞ユダヤ人のために行われた英雄的行為として受け取られている。家族にとってエディット・シュタインの嘆願は，ユダヤ人との連帯を示す勇気ある行動であり，その評価はエディットの手紙に「沈黙」したカトリック教会の権威に対する痛烈な非難と，表裏一体の関係にある。

2-3. 手紙公開後の論争

手紙の公開に際して，米国のカトリック雑誌 *Inside the Vatican* 誌には，エディット・シュタインの手紙に関するウィリアム・ドイノの記事が掲載された[23]。この記事でウィリアム・ドイノは，エディット・シュタインの手紙に対する時の教皇ピオ十一世から直接の返事はなかったものの，「エディット・シュタインは，実にパチェリ枢機卿から，早々に返事を受け取った」[24] として，バチカン国務長官パチェリ枢機卿からラファエル大修道院長に届けられた手紙の文面を掲載している。

大司教様，四月十二日に賜りましたお優しい手紙と添付されておりました文書（エディット・シュタインの手紙）の御礼を申し上げます。彼女の手紙がお望み通り教皇様（教皇ピオ十一世）のもとに届けられたことを，あ

[21] Susanne M. Batzdorff, "A Martyr of Auschwitz", *EDTH STEIN Selected Writings With Comments, Reminiscences and Translations of her Prayers and Poems by her niece*, Templegate Publishers, 1990, pp. 110-111.

[22] Susanne M. Batzdorff, "Aunt Edith Jewish Heritage, Catholic Saint", *America*, February 13, 1999, The Jesuits of the United States and Canada, pp. 19-20.

[23] William Doino, "Edith Stein's letter," *Inside the Vatican*, March 2003, pp. 22-27. この記事には公開されたエディット・シュタインの手紙の写真と英訳が掲載されており，編集スタッフにより「教会の抵抗の歴史（A Histry of the Church's Resistance）」（pp. 28-29）「パッチェリはナチスを非難した（Pacelli Denounces the Nazis）」（pp. 30-31）という解説記事が付記されている。

[24] William Doino, 2003, p. 25.

なた様から適切な方法で差出人にお知らせ下さいますように。私はあなた様とともに，この困難な時代に，教皇様が特別な方法で，聖なる教会を守り，教会のすべての子どもたちに堅い恵みと寛大な心 —— これらが私たちの最終的な勝利を予示するものです —— を与えてくださいますように，お祈り申し上げます。[25]

また同じ記事でウィリアム・ドイノは，パチェリ枢機卿が1933年の4月にドイツの教皇大使チェーザレ・オルセニゴに宛てた手紙[26]を根拠に，エディット・シュタインの手紙よりも以前に，バチカンはナチスのユダヤ人迫害に対して既に行動に移っており，ナチスによる第三帝国成立直後のユダヤ人迫害のイデオロギーに抵抗を示していたと主張している。*Inside the Vatican* 誌の立場は，明らかに，ユダヤ人社会から向けられている「教会の沈黙」への批判を念頭におき，当時の教会の姿勢とピオ十一世の言動を擁護するものである。

スザンヌ・バッツドルフは自著において，これまで未公開だったエディット・シュタインの手紙が教皇庁によって公開された時の驚きとともに[27]，この手紙に対するカトリック側の論者の反応に批判を加えている。上記のウィリアム・ドイノの主張に対しては，「私にはドイノ氏が，その（パチェリ枢機卿の手紙の）行間を，実際に含まれている意味よりもずっと多くのことを引き出して読んでいるように思える」[28] とし，叔母が「早々に返事を受け取った」という記述に強く抗議している。スザンヌ・バッツドルフは，叔母が決して満足のいく形で返事を受け取っていないことを強調している。

ヴァルツァーに届けられた手紙 —— エディット・シュタインに対しては間接的な伝言しか記されていない —— が，待ち望んだ嘆願への返答であると決めてかかるような主張はなされるべきではない。彼女の手紙は，深刻な苦しみの中で記され，有意義な回答を心から望んでいたことは明らかであり，第三者へ宛てられた受け取りの通知よりも，当然もっとましな回答を受け取ってしかるべきである。私たちはエディット自身の記述から，彼女が自分の手紙が教皇のもとに「封印したまま」届けられたことを知っている。しかしながら，それに続く「他には何も起こらなかった」という言葉から，エウジェニオ・パチェリからラファエル・ヴァルツァーに宛てたその手紙を，彼女が自分の手紙への返答と見なしていたことは明らかである。[29]

---

[25] 同上 p. 23.

[26] 同上 p. 25. この手紙は1933年4月4日の日付で，パチェリ国務長官からベルリン教皇大使に教皇の指示を伝えた手紙で「教皇様は，あなた様が，望ましい方向で手をさしのべることが可能であるか，どのように可能であるのかを見極めるよう，指示なさっています」と記されている。

[27] 手紙が公開された時の驚きを，スザンヌ・バッツドルフは次のように記している。「この手紙の正確な内容は知られていなかったため，エディット・シュタイン研究者同様，彼女の身内もまた，強く関心を抱いていた。その手紙は，七十年間，バチカンの未公開文書資料のなかにあった。やっとのことで秘密のベールがあげられ，その手紙が公開されたのは，2003年の2月15日のことだった。2003年2月18日，*Die Welt* 誌にオリジナルのドイツ語が，同年2月19日に，*Corriere della Sera* 誌にイタリア語訳が掲載された。これは，私が生きているうちに実現することは期待していなかった出来事であった。私は震えるほど興奮した。1933年の春に，新しいヒトラー政権のもとドイツで何が起こっていたかについて，叔母が燃えるように強烈な懸念を表すべくまとめた言葉と，ついに出会うのである。私は，ピオ十一世に宛てたエディット・シュタインの手紙のオリジナルのドイツ語版文書を手に入れるとすぐに，それを英語に翻訳した。後でわかったことだが，他のふたりの人物，ジョン・サリバン神父（OCD）とジョセフィン・ケッペル修道女（OCD）が同じ行動をとっていた。そこで私たちは共同で，三人が満足できるオリジナルに忠実で正確なひとつの文を仕上げた。」Susanne M. Batzdorff, *Aunt Edith : Jewish Heritage of a Catholic Saint* (Second edition), Templegate Publishers, 2003, p. 225.

[28] 同上 pp. 229-230.

[29] 同上 p. 231. パチェリ枢機卿からの返信を，エディット・シュタインがラファエル大修道院長か

スザンヌ・バッツドルフはドイツの雑誌 *Die Welt* 誌に掲載されたポール・バデによる記事「沈黙を続ける人々に責任がある」[30] にも批判が加えている。ポール・バデは 1937 年に公布された回勅 *Mit brennender Sorge* が，エディット・シュタインの手紙に対するバチカンの応答と捉えている。

> 教会は沈黙を続けたが，永遠にではない。我々はエディット・シュタインの手紙が何の効果もなかったと考えることはできない。1937 年 3 月 14 日に，バチカンはドイツ語で回勅を公布した。パチェリは，ドイツの権力者たちを「全くむなしい唱道者たち」として厳しく非難し，彼らの「傲慢なプロメテウス的精神」を鋭く糾弾している。パチェリの言葉の中には，彼女の思いが明らかに表現されており，それはうち砕かれた「女性博士」の手紙の最後の名残であることは間違いない。[31]

ポール・バデはこの回勅が 1933 年のエディット・シュタインの手紙の「効果」でありその影響の「名残」であると主張している。スザンヌ・バッツドルフの兄，アーンスト・ビバーシュタインは，ポール・バデに対して早々に次のような抗議の手紙を送っている。

> エディット・シュタインの「嘆願書」に回勅 *Mit brennender Sorge* を関連づけようとすることは，道理に合いません。彼女が気遣っていたのは迫害されたユダヤ人であります。彼女は 1933 年の春，あなたも書いていらっしゃるあの手紙を通して，反セム主義的な非道に対して，即座に抗議してもらうよう，熱心に説得したのです。何年か後に『燃えるような憂慮をもって』は，公布されました。そこには，教会の諸問題が閉鎖的に論じられており，ユダヤ人についてはどこにも言及されていません。抗議すべきナチスの人種政策のあり様については，単に曖昧な表現でほのめかしているにすぎず（それは，主に「非アーリア系」のカトリック信者の扱いに関する批判として受け取られました），ユダヤ人の保護やナチスの反ユダヤ政策への非難と理解できる箇所はまったくないのです。[32]

スザンヌ・バッツドルフも同様に，この回勅がエディット・シュタインの手紙に対する回答に相当するという見方を退けている[33]。

『どのようにして私はケルンのカルメル会

らそのままの形で受け取ったかどうか定かではない。エディット自身はこの返信について次のように記している。「この手紙が開封されないまま教皇様のもとに届けられたことを知っています。その後しばらくして，教皇様が私と私の親族を祝福する旨のたよりを受け取りました。ほかには何も起こりませんでした。その後，ときおり私は，この手紙がほんの一瞬でも教皇様の心を横切ったのかどうか心配になりました。ドイツのカトリック信者の将来について私がかつて予言したことは，ここ何年かの間に次第に現実のものとなっているのです。」前掲，西宮カルメル会訳『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』p. 95 および，Stein, Edith, *Selected Writing*, ed. by Susanne M. Batzdorff, Templegate Publishers, 1990, p. 17.

[30] Susanne M. Batzdorff, 2003, p. 232 ; Paul Badde, “Die Verantwortung fällt auf die, die schweigen” (“The responsibility falls on those who remain silent,” *Die Welt*, February 18, 2003. Translation from the German by Susanne M. Batzdorff.)

[31] 同上 p. 232.

[32] 同上 pp. 232–233. この手紙は，2003 年 2 月 21 日に，アーンスト・ビバーシュタインから E メールによりポール・バデに送られた。上の引用はドイツ語で書かれた手紙の文面をアーンスト本人が英訳したものである。

[33] スザンヌ・バッツドルフは 2003 年の上掲書で，この回勅十五節と十六節（オリジナルのドイツ語文書では十九節と二十節）の文章を英訳して自著に掲載し，その文面にはカトリック教会が旧約聖書の正当性を支持していることやイエス・キリストがユダヤ民族の出自であることを認めているという趣旨しか見出すことができず，「この回勅に，当時のドイツで反セム主義の猛威が蔓延していたことに対する抗議を見いだせない」と主張している。

に入ったか』というエッセイにおけるエディット・シュタインの言及によれば，教皇ピオ十一世への手紙に対する返事がなくても，彼女は腹を立てなかったことがわかる。もっとも，彼女は教会の忠実な娘として執筆したので，嘆願を差し上げた「教皇様」の権威には謙虚に従っていたわけであるが，彼女が落胆していたことは明らかである。彼女は単に，返事を受け取らなかったと言っているが，ドイツの教会の運命に関する自分の恐ろしい予言が現実のものとなりはじめた頃に，教皇は自分の進言を覚えているだろうかと思いを巡らしてもいる。過去を顧みて，彼女の死を悲しみ，ナチスがとった極悪非道な政策により犠牲者となった何百万人もの死を悲しむ私たちは，この大虐殺を阻止するための抗議があまりにも欠けていたことに，怒りと失望を感じる。学術的権威や宗教的権威によるより迅速な対応がなされたなら，別の結果が導き出されたかどうか，私たちにははっきりわからない。しかし，それが試みられなかったことに，悲しみを禁じ得ない。[34]

3.　エディット・シュタインにおけるユダヤ人問題解決の本質

3-1.　見逃された視点

エディット・シュタインの家族は，件の手紙を時の教皇に対して同胞のユダヤ人の擁護を嘆願した英雄的行為として見る一方で，その願いを聞き入れずに「沈黙」した教会を非難している。一方でカトリックの論者の中には，ウィリアム・ドイノやポール・パデのように，この手紙をバチカンが大戦中にナチスに対して抵抗した根拠として扱い，回勅 *Mit brennender Sorge* と関連づけて論じる者も存在する。両者の主張は全く反対の方向を向いている。

しかしながら両者には，明らかに共通する点が見られる。それはエディット・シュタインの手紙を，大戦中のナチス・ドイツの反ユダヤ主義的政策に対するカトリック教会の政治的対応と密接に結びつけて捉えようとする見方である。既に述べたように，この手紙が時間的にも内容的にもそのような文脈において捉えられやすい対象であることは確かである。私見によれば，公開されたエディット・シュタインの手紙がこのような関連付けのもとでのみ論じられることは，古典的論争の火種を掘り起こしてその再燃を促し，宗教間対話の緒について間もない両宗教が，建設的で新しい段階へ進むことを妨げているように見える。何よりもこのような論争はエディット・シュタイン自身の本意とは大きくかけ離れているところで行われていると考えられる。実際に，その手紙の文面と送付に至る経緯に注目すると，エディット・シュタインがピオ十一世に手紙を記したという行為を，単に政治的意味合いを帯びたバチカンへの働きかけとして見る解釈が全く当てはまらないことが知られるのである。

件の手紙が書かれた1933年春は，エディット・シュタインがドイツ国内のユダヤ人問題に自らがどのように対処すべきかを模索していた時期であるとともに，カルメル修道会に入会することを決意した時期でもある。エディット・シュタインが手紙を記した動機には，明らかに，彼女のユダヤ人としてのアイデンティティと連帯感，そしてユダヤ的なルーツを持つカルメル修道会の霊性が深く関わっている。このような視点は，上記の論争の射程からは見逃されている。1933年春におけるエディット・シュタインの精神的状況を詳細に検証することにより，公開された手紙は，カトリックとユダヤ教の論争の火種ではなく，宗教間対話の深化を促す題材として新しい意味を帯びると考えられる。

3-2.　召命への三段階の光

エディット・シュタイン自身にとって，この手紙がどのような意味を有していたかを考察するにあたり，『わたしはどのようにして，ケルン

[34]　Susanne M. Batzdorff, 2003, p. 234.

のカルメル会に入会したか』における 1933 年春の頃の記述が重要なテキストになる[35]。同書は，エディット・シュタインがミュンスターのドイツ教育研究所に勤めていた 1933 年初頭から，同年 10 月 15 日にカルメル会に入会するまでの出来事について時系列的に記されている。エディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙は，ボイロンを訪問中の 1933 年の春（4 月の初金曜日から，ミュンスターに帰った 19 日までの間のどこかの日）に書かれている。『わたしはどのようにして，ケルンのカルメル会に入会したか』で扱われているのは，このボイロン訪問前後の時期を含め，エディット・シュタインがカルメル会に入会すること，さらには自らの献身の意向を祈り確認した時期にあたる。同書をもとに 1933 年春当時のエディット・シュタインの行動の間に見られる内面的状況を細かく辿ってみよう。

まず「四旬節のある夜」に，部屋の鍵を失くしてしまったエディット・シュタインは，同僚の教授の家に宿泊することになったが，その晩にあるインスピレーションを受ける。

> すでにわたしは，ユダヤ人に対する数々の迫害を耳にしていました。しかしこの夜，突如として内なる光がわたしを照らし，今，新たにこの民の上にのしかかっているのは神のみ手であり，この民の運命はわたしのものであるということがはっきりしてきました。[36]

「内なる光」として表現されるインスピレーションは，「ユダヤ民族の運命と自分の運命が同じである」すなわち「自分がユダヤ民族との連帯の中にある」という悟りがエディット・シュタインの精神に宿ったことを意味する。この場面を，《**第一の光**》と呼ぶことにしよう。

次に，その四旬節の聖木曜日に，エディット・シュタインはボイロンに出かける。エディットは，聖週間と復活祭を，彼女の霊的指導者ラファエル大修道院長が居るボイロンで過ごすことを，数年来の習慣としていた。しかしこのたびの訪問には，件の「教皇への嘆願」についてラファエル大修道院長と相談するという目的も兼ねられていた。

> わたしはそれまでユダヤ人問題に対して何かできることはないかと思い巡らしていたのですが，結局，ローマに行って，教皇様に謁見を願い，回勅の発布をお願いしようという計画を立てました。けれどもわたしはこのような企てを自分だけの判断でしたくはありませんでした。[37]

ここで注意を喚起しておきたいことは，「教皇への嘆願」に関する相談は，エディット・シュタインにとってボイロン訪問の「もうひとつの理由」であって，本来の目的は，「静かな黙想のうちに過ごす」ことであったという点である。さらに「教皇への嘆願」という計画を，エディット・シュタイン自身は「本質的なもの」と感じていなかった点である。次の記述に注目したい。

> 上記のような活動に奔走することは，わたしの性格にかなりの犠牲を要求することですが，それでも「本質的なもの」はそこにはないと感じていました。では，「本質的なもの」がいったいどこにあるのか，わたしには，それがまだわかりませんでした。[38]

エディット・シュタインは，当時強まっていたユダヤ人に対する迫害に対して「何か自分にできること」を探していた。それは「教皇への嘆願」という形をとった[39]が，実のところエ

[35] 以下の引用は西宮カルメル会訳 上掲書による。
[36] 同上 p. 92.
[37] 同上 p. 93.
[38] 同上 p. 93.
[39] 手紙を書いた正確な日付は知られていないが，ラファエル大修道院長の推薦文の日付は，4 月 12

ディットはその行為を「本質的なもの」ではないと感じていた。そして何が「本質的なもの」であるのかという問いの答えを模索しつつ，ボイロンの「静かな黙想」に臨んだのである。

その木曜日に，エディット・シュタインは，洗礼の準備を手伝っていた友人に会うため，ケルンに立ち寄る。あらかじめエディットは，その友人に，ケルンで「聖時間」を過ごす場所を探してもらっていた。その場所は，「ケルン・リンデンタールのカルメル会の聖堂」であった。その晩，すなわち「聖金曜日の前晩」，リンデンタールのカルメル会の聖堂でエディット・シュタインは，「主と話していた」。

> 司祭の説教は美しく感動的なものでしたが，わたしの中には彼の言葉よりもっと深い何かが宿っていました。わたしは主と話していたのです。そして次のように申しました。「今ユダヤ人の上におかれているのは，主ご自身の十字架であることがわたしにはわかります。多くのユダヤ人にはそれがわかりませんが，それがわかる者は，全ユダヤ人の名において進んで十字架を引き受けるべきです。わたしはそれを望みます。ただどのようにしたらよいかお示しください。」祈り終えたとき，聞き入れられたという内的な確信がありました。けれどもどのようにして十字架を背負うことになるかは，まだわかりませんでした。[40]

エディット・シュタインはこの場面で，ユダヤ人への迫害が「主の十字架」であることを悟り，自らその十字架を担うことを希望する。そしてその願いが「聞き入れられた」という「内的な確信」を得る。しかし，まだその十字架を担うことが具体的に何を示すかはわからない状態であった。この場面を《**第二の光**》と呼ぶことにしよう。

エディット・シュタインがボイロンからミュンスターに帰った日は，4月19日である。そして，その10日ほど後に，エディットはカルメル会への入会の時期が来たことを悟る。それは次のような場面である。

> ボイロンからもどって，十日ほどたったある日，次のような考えが頭に浮かびました。「ついにカルメル会に入るときが来たのではないか」と。十二年前から，つまり1921年の夏，『アビラの聖テレサの自叙伝』と出会って，真の信仰を求めての長い旅路に終止符を打ったときから，わたしの目的はカルメル会でした。1922年の元旦に洗礼の恵みをいただいたときも，これはまだカルメル会に入る準備にすぎないと感じました。[41]

エディット・シュタインはこの日，洗礼を決意した頃から希望していたカルメル会への入会を実現するときが来たことを悟る。これまでエディットは様々な機会に幾度もカルメル会への入会を考えてきたが，娘の改宗に苦悩していた母への気遣いや霊的指導者の勧めにより入会を断念していた[42]。しかしこの日，エディット・シュタインは「今や，すべての障壁は崩れ去ったのです。わたしの仕事は終わりました。」[43] と考える。「終わりました」とされるエディットの「仕事」とは，これまで自らに与えられてきた教育や研究の仕事である。4月30日，彼女はカルメル会への入会という思いが神に受け入れられたという確信を得る。承諾を得た次の場面を，《**第三の光**》と呼ぼう。

日であった。Susanne M. Batzdorff, 2003, pp. 228-229. スザンヌ・バッツドルフは，公開されたエディット・シュタインの手紙に日付がなかったことについて，エディットが直に教皇に宛てて郵送するのではなく，ラファエル修道院長に預ける方法をとったので，あえて日付をいれなかったのであろうと推測している。

[40] 西宮カルメル会訳，上掲書 p. 94.

[41] 同上 p. 97.

[42] 同上 pp. 97-98.

[43] 同上 p. 98.

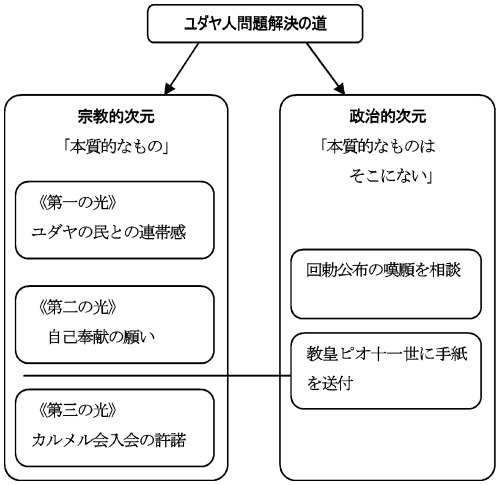

図2　1933年春におけるエディット・シュタインの選択

> 4月30日，それはよき牧者の主日でしたが，聖ルドゲルス教会では十三時間の連続祈祷によって，守護聖人の祝日を祝っていました。午後遅く，わたしはそこに行って，カルメル会に入るべきときが来たのかどうかを知るための光が与えられないうちは，ここから出て行くまいと自分に言い聞かせながら祈りました。そして祝日の最後を締めくくる御聖体の祝福が与えられたとき，わたしはよき牧者から承諾の返事をいただきました。[44]

1933年春にエディット・シュタインの内面に起こった出来事について『わたしはどのようにして，ケルンのカルメル会に入会したか』の記述をもとに跡づけてきた。そこには**《第一の光》《第二の光》《第三の光》**という「内的な確信」を得るに至る三つの段階が見られた。

この「内的な確信」の三段階は，先に示された「本質的なもの」の発見との対応関係にある。**《第一の光》**によって，迫害を受けるユダヤ民族との深い連帯意識を身に受けたエディット・シュタインは，**《第二の光》**によって，「本質的なもの」の「意味」を垣間見る。すなわち「全ユダヤ人の名において進んで十字架を引き受ける」という自己奉献の行為こそが，求めていた「本質的なもの」であることを確信するのである。最終的に**《第三の光》**によって，その「本質的なもの」を自らが体現するための現実生活における具体的な「道」として，カルメル会に入会する方途が示される。カルメル会への入会は世間的生活からの逃避ではなく，神に自己を捧げ尽くすことにより，これまでの教育や研究による方法では達し得なかったすべての人々にまで，力が及ぶことを意味する。

エディット・シュタインにとって独自な意味を持つ「本質的なもの」とは，迫害の中にあるユダヤ人問題の解決への道と解釈することができる。彼女はユダヤ人問題の解決のために自らがどのような方法で何をすべく召されているか，その答えを求めて1933年の聖週間を通して「黙想」した。答えは「黙想」を通して上記の三つの段階で徐々に与えられた，と読むことができる。

3-3.　ユダヤ人問題の解決とカルメルへの道

件の「教皇への嘆願」は，**《第一の光》**と**《第二の光》**を経た段階で，「手紙」をラファエル大

[44]　同上 p. 98.

修道院長に託すという形で実行された。しかしエディット・シュタインはその試みを「本質的なもの」と感じることはなかった。この時点でエディット・シュタインは，ユダヤ人との連帯感をもとに自分が十字架を担うことを願っており，神がその願いを聞き入れてくださるとの内的確信があった。「教皇への嘆願」の計画は，ユダヤ人問題のために自分ができることを模索する中で選択されたひとつの具体的な試みであったが，《**第一の光**》と《**第二の光**》を経たエディットにとって，その行動に伴う犠牲は「十字架を担う」という意味での自己奉献に比べればユダヤ人問題の解決にとって「本質的」ではない，と感じられた。

教皇に宛てた手紙でエディット・シュタインは，民族や国家を神格化する異端的なイデオロギーによってユダヤ人迫害政策が実施されていることを具体的に説明し，カトリックに対してもその攻撃は及んでいるとする。そして，その責任の一端を，そうした蛮行に対して沈黙している人々の態度に見ている。さらに，カトリック信者は教会が「声をあげる」ことを期待しており，カトリック信者が「新たな行動に向かって自分自身を無条件的に捧げなければ」，すなわち「無条件的な献身」をしなければ，事態はよくならないことを訴えている。手紙は次のような文章で結ばれている。

> もしこの沈黙が更にまだ続くのであれば，私たち —— 教会の信心深い子供たち，そしてドイツの状況を目を見開いて見ている者たち —— は皆，教会の信望にとって最悪の事態を恐れます。現在のドイツ政府とともに平和の獲得に達するためには，この沈黙が長く続くことはありえないと私たちは確信しています。当分の間，カトリックに対する攻撃は静かに，そしてユダヤ人に対するよりは残忍でない仕方で，しかし同じような組織的な仕方で行われることでしょう。もしカトリック信者が，新たな行動に向かって自分自身を無条件的に捧げなければ，ドイツでカトリック信者が誰も聖務日課を唱えることができなくなる日まで，そう長くはかからないでしょう。[45]

この手紙がユダヤ人問題への解決のために教皇の回勅公布を嘆願するという目的で書かれたことは，手紙が公開される前から知られていた。そのためエディット・シュタインの家族たちはその勇気ある行為を賞賛するとともに，カトリック教会が彼女の願いに応答しなかったとして非難している。手紙が公開されたときその信憑性について，多少の訝しさを感じる家族もいた。それはこの手紙の中に，意外にも，直接「回勅の公布」に関する具体的な文言がなかったからであった[46]。

しかしながら，この手紙が，《**第一の光**》と《**第二の光**》を経た段階におけるエディット・シュタインの内面を映し出す文章と見るとき，別の見方が可能になると思われる。手紙の最後の文脈に現れる「新たな行動に向かって自分自身を無条件的に捧げなければ」という言葉に着目してみたい。この「無条件的な献身」に関する記述は，エディット・シュタインが，《**第一の光**》と《**第二の光**》を経た段階で得た「内的な確信」，すなわち「ユダヤ人の名において進んで十字架を引き受ける」ことがユダヤ人問題の解決につながるとの確信を表現したものと解釈することができる。ここで「無条件的な献身」を求められている主体は，当時のカトリック信者全般であることは確かであるが，同時にやがてユダヤ人のひとりとして受難に遭うことが予想される自分自身でもある。「新たな行動に向かって自分

[45] "Saint's Letter to Pius XI on Nazism Asked Church to Speak Out", *Origins* CNS documentary service, Vol. 32 : No. 39, pp. 655-656 (March 13, 2003).

[46] スザンヌ・バッツドルフの兄アーンスト・ビバーシュタインは，公開された手紙が本当にエディット・シュタインの手紙であるか疑っているという。Susanne M. Batzdorff, *Aunt Edith ; The Jewish Heritage of a Catholic Saint*, pp. 227-228.

自身を無条件的に捧げる」ことは，ユダヤ人問題に臨む自らの受難を既にエディット・シュタインが「黙想」の中で悟っていたことを ―― それが具体的にどのような仕方で起こるかはわからなかったにせよ ―― この言葉は反映している。

さらに「無条件的な献身」という言葉は，その対極にある「条件的な行為」を暗示している，と解釈することができる。カトリック教会による「回勅の公布」は，当時の社会状況にあって「宗教的意味合い」にとどまらず，当時のナチス政権の政策を批判する「政治的意味合い」を帯びたことは明らかである。政治的行動はその本質に「条件的な行為」という側面を内包している。エディット・シュタインはこの時点で，そのような政治的行動につながる「教皇への嘆願」が，ユダヤ民族との連帯のうちに主の十字架を担うという自身の召命にとって「本質的なもの」と感じなかった。その点，敢えて回勅の公布を嘆願する具体的な文言を使わずに「自分自身を無条件的に捧げる」という言葉をもって締めくくられたことは，ユダヤ人問題の解決にとって何が「本質的なこと」であり何が「本質的なこと」でないかを悟っていたエディット・シュタインの，その時点での内的確信を明示していると考えられる。

この手紙の一件が終わり，ミュンスターに戻ってから，エディット・シュタインは《**第三の光**》によってカルメル会への道が開かれる。カルメル会への入会を悟ったとき，エディット・シュタインは「私の仕事は終わりました」と語っている。その「仕事」は，カルメル会に惹かれながらもその時期が来るまで世間で与えられた教育と研究に打ち込むことであった。公開された手紙の署名箇所には「エディット・シュタイン博士，ドイツ教育学研究所講師」と記されている。この肩書きは社会の只中で働くエディット・シュタインの姿を示している。

世間的な仕事の只中にいた 1933 年の春，エディット・シュタインの心は既に《**第三の光**》へと準備されていたと考えることができる。実際に，手紙をラファエル大修道院長に託して間もなく，彼女はその世間での肩書きによる仕事を終える。すなわち，真理探究，長い準備と黙想を経て，エディット・シュタインは後に自ら望んで名づけた「十字架に祝せられたテレジア修道女」となる道のすぐ手前にまで到達していた。彼女の目前にはカルメルへの道が三段階の光に照らされ明瞭に浮かび上がった。手紙を締めくくる「新たな行動に向かって自分自身を無条件的に捧げなければ」という言葉には，ユダヤ人問題の解決のための十字架を背負う自己奉献の道とカルメルへの道が重なり合ったエディット・シュタインの内面的状況が，明確に表れていると考えられる。

む す び

エディット・シュタインの手紙が公開されるに伴い，カトリックとユダヤ教の双方から様々な反響があった。カトリックのある論者たちは，エディット・シュタインの嘆願によって 1937 年に公布されたピオ十一世による回勅 *Mit Brennender Sorge* の公布が促され，カトリック教会はナチスに対してプロテストの姿勢を示したと主張した。このような主張は，同回勅が，ナチスのユダヤ人迫害政策の阻止を目的とするカトリック教会の政治的な働きかけであったとの解釈に基づいている。他方，エディット・シュタインの家族は，件の手紙と 1937 年の回勅は無関係であると見なし，ピオ十一世がエディット・シュタインの嘆願を無視し，ナチス政権の蛮行に対して有効な政治的影響力を行使しなかったとして非難した。このような異なる二つの解釈に基づく論争は，ピオ十二世在位中のいわゆる「教会の沈黙」に対する非難が，戦後たびたび繰り返されてきた事態に類似している。その意味で，手紙の公開は，古典的論争が新しい形で再燃する火種となったといえる。本稿では，このような論争を概観した上で，論争の射程に欠け

ている視点を提示した。すなわち，公開された手紙の文面を政治的意味合いを帯びたバチカンへの働きかけとしてではなく，むしろエディット・シュタイン特有のユダヤ人としてのアイデンティティと，カルメル会の霊性[47]に見られる十字架への無条件的献身という信仰に基づく「殉教」の意志を読みとることができるテキストとして再検討する必要性を，文献をもとに検証した。

エディット・シュタインにとって「教皇への嘆願」は，ユダヤ人問題を根本的に解決するために為しうる「本質的な」行為とは感じられなかった。むしろエディット・シュタインは，当時の教会にも周辺諸国にも「政治的な手法」では完全に解決できなかったユダヤ人問題を，独自な方法で解決しようと試みた。エディット・シュタインは，その解決の道に長い真理探究と信仰生活を経て，召命に至る三段階の「光」に照らされ導かれた。彼女が最終的に自らに課した解決策は，ユダヤ民族と連帯しその救いのために「無条件的な献身」をすることであった。換言すれば，それは「政治的次元」とは無縁な，神への愛と隣人愛に基づく純然たる「宗教的次元」における解決の道であった。

このように理解するならば，公開されたエディット・シュタインの手紙の文面に，「回勅の公布」という具体的な文言 —— それは政治的意味合いを内包する要請ともなろう —— が存在しなかったことも決して不自然ではない。公開された手紙は，上記の論争に見られた「政治的次元」とのつながりではなく，1933年の春に神の光に導かれつつエディット・シュタインの内部に生じた確信を裏付けたことに，積極的な意味があるように思われる。

[47] カルメル会が旧約の時代の預言者エリアにさかのぼるユダヤ教的起源を有していることは，エディット・シュタインがカルメル会の霊性に共鳴した大きな要因であると考えられる。その要因の検証は，別稿で改めて論じたい。なおカルメル会の起源とそのユダヤ的性格について知る邦語文献としては，聖マリアのフランシスコ修父『カルメル会の会則とその精神』ドン・ボスコ社 1990年（第三版），十字架の聖ヨハネ著／奥村一郎訳『カルメル山登攀』ドン・ボスコ社 2004年（第8版），ピーター・トマス・ロアバック著／女子カルメル会訳・男子カルメル会監修『カリットへの旅—カルメル会の歴史—』サンパウロ 2003年を参照。

参考文献

青山吉信『聖遺物の世界』山川出版社　1999年

雨宮栄一著『ユダヤ人虐殺とドイツの教会』教文館　1990年第五版（初版1987年）

市川　裕『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版会　2004年

『カトリック生活』（2003年5月号）ドン・ボスコ社

木鎌耕一郎「エディット・シュタイン列聖問題の行方—アメリカの反響をめぐって」『比較文化研究』No. 54　日本比較文化学会　2001年（pp. 23-32）

木鎌耕一郎「宗教と民族的アイデンティティ—*Nostra Aetate* とエディット・シュタインをめぐる問題」『比較文化研究』No. 61　日本比較文化学会　2003年（pp. 11-19）

木鎌耕一郎「エディット・シュタインをめぐるユダヤ教ラビの見解」『八戸大学紀要』第26号　八戸大学商学部　2003年

木鎌耕一郎「エディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙」『八戸大学紀要』第28号　八戸大学商学部　2004年（pp. 105-113）

教皇庁国際神学委員会『記憶と和解　教会と過去の種々の過失』（東門陽二郎訳）日本カトリック中央協議会　2002年

教皇庁国際神学委員会著／東門陽二郎訳『記憶と和解 —— 教会と過去の種々の過失』日本カトリック中央協議会　2002年

教皇庁ユダヤ教との宗教的関係委員会著／和田幹男訳『わたしたちは記憶にとどめます —— ショアーを反省して』『人間文化』第3巻（英知大学人間科学研究室紀要）　2000年（pp. 161-175）

黒川知文著『ユダヤ人迫害史 —— 繁栄と迫害とメシア運動』教文館　1997年

コンラッド・ド・メーテル，エディット・シュタイン／福岡カルメル会・西宮カルメル会訳

『エディット・シュタイン　小伝と手記』女子パウロ会　1999年
ジョン・サリバン編／木鎌耕一郎訳『聖なる住まいにふさわしき人　エディット・シュタイン列聖のドキュメント』聖母の騎士社　2002年
須沢かおり著『エディット・シュタイン　愛と真理の炎』新世社　1993年
須沢かおり「エディット・シュタインとユダヤ人問題 —— 列聖への歩み」『キリスト教文化研究所年報 No. XX』ノートルダム聖心女子大学キリスト教文化研究所　1998年（pp. 243-272）
須沢かおり「エディット・シュタインの "Unterwegs ad orientem" に関する一考察」『カトリック研究 71号』上智大学神学会　2002年（pp. 119-147）
竹下節子『聖者の宇宙』青土社　1998年
竹下節子『ローマ法王』筑摩書房　1998年
田丸徳善・星川啓慈・山梨有希子『神々の和解 —— 二一世紀の宗教間対話』春秋社　2000年
立山良司『揺れるユダヤ人国家 ポスト・シオニズム』文芸春秋　2000年
ルイジ・チヴィスカ訳『カトリック教会法典』有斐閣　1985年復刻版（初版 1962年）
手島勲矢編著『わかるユダヤ学』日本実業出版社　2002年
マリア・アマータ・ナイヤー著，マリア・マグダレナ・中松訳，田中輝義監修『エーディット・シュタイン —— 記録と写真に見えるその生涯』エンデルレ書店　1992年
日本カトリック司教協議会教会行政法制委員会訳『カトリック新教会法典』（オンデマンド版）有斐閣　2001年
南山大学監修『世界に開かれた教会』中央出版社　昭和43年
南山大学監修『第2バチカン公会議公文書全集』中央出版社　1986年
マシュー・バンソン著／長崎恵子・長崎麻子訳『ローマ教皇事典』三交社　2000年
ハンス・ユルゲン・マルクス「諸宗教の存在意義 —— キリスト教神学の自己反省 ——」『日本カトリック神学会誌』第13号　2002年（pp. 53-74）
カルロ・M・マルティーニ枢機卿著／平井一子訳「ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼 —— 和解」『神学ダイジェスト』90号 01年夏季号，上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会　2001年（pp. 89-97）
宮平　宏・藤谷　健『ローマ法王—世界を駆けるヨハネ・パウロ2世』（岩波ブックレット No. 537）岩波書店　2001年
ジョージ・L・モッセ／三宅昭良訳『ユダヤ人の〈ドイツ〉宗教と民族をこえて』講談社　1996年
渡邉　浩「列聖手続きの歴史的展開 —— 起源から教皇による列聖まで ——」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要第2号』2001年（pp. 33-58）
和田幹男「キリスト教とユダヤ教の対話の歩み —— 第2ヴァチカン公会議から20世紀の終幕まで ——」『人間文化』第3巻（英知大学人文科学研究室紀要）　2000年3月（pp. 57-71）
Badde, Paul: "Die Verantwortung fällt auf die, die schweigen", *Die Welt*, February 18, 2003.
Banki, Judith H. and Pawlikowski, John T., O.S.M. (ed): *Ethics in the Shadow of the Holocaust ; Christian and Jewish Perspectives*, Sheed & Ward, Chicago, 2001.
Batzdorff, Susanne M.: "Aunt Edith: Jewish Heritage, Catholic Saint." in *America*, America Press Inc. (February 13, 1999) pp. 15-23.
Batzdorff, Susanne M.: *Aunt Edith : Jewish Heritage of a Catholic Saint* (Second edition), Templegate Publishers, 2003.
Biberstein, Ernest with Michael Bberstein: "Open Letter to John Poul: Speak the Whole Truth about Christians and the Holocaust," in *National Catholic Reporter* 35 (October 23, 1998) p. 22.
Blet, Pierre, S.J.: *Pius XII and the Second World War ; According to the Archives of the Vatican*, Pulist Press, New Jersey, 1997.

Cargas, Harry James Ph.D. (ed) : *The Unnecessary Problem of Edith Stein*, Studies in the Shoah Vol. IV, University Press of America, 1994. pp. 17-21.

"Saint's Letter to Pius XI on Nazism Asked Church to Speak Out", *Origins* CNS documentary service, Vol. 32 : No. 39, pp. 655-656 (March 13, 2003).

Cavnar, Cynthia : *Meet Edith Stein ; From Cloister to Concentration Camp, a Carmelite Nun Confronts the Nazis*, Charis Books, Servant Publications, 2002.

Cohn-Sherbok, Dan (ed) : *Holocaust Theology ; A Reader*, New York University Press, New York, 2002.

Cornwell, John : *HITLER'S POPE : The Secret History of Pius XII*, Penguin Books, 2000.

Croner, Helga (ed) : *The Holocaust Never to be Forgotten : Reflections on the Holy See's Document We Remember*, A Stimulus Book, 2001.

Doino, William : "Edith Stein's letter," *Inside the Vatican*, March 2003.

Fisher, Eugene J. : *INTERWOVEN DESTINIES : Jews and Christianity through the ages* (Studies in Judaism and Christianity), Stimulus Foundation (A Stimulus Book) 1993.

Flannery, Edward H. : *The Anguish of the Jews ; Twenty-Three Centuries of Antisemitism*, A Stimulus Book, Paulist press, New York, 1985.

Flannery, Edward H. : "Jewish-Christian Relations Focus on the Future," *The Journal of Ecumenical Studies* 34 (Summer 1997).

Goldman, Peter : *Hitler and the Vatican : Inside the Secret Archives that Reveal the New Story of the Nazis and the Church*, Free Press, 2004.

Herbstrith, Waltraud OCD (ed) : *Never Forget : Christian and Jewish Perspective on Edith Stein* ranslated by Susanne Batzdorff (ICS Publications 1998. Washington) 〔*Erinnere dich—vergiß es nicht : Edith Stein—christlich-jüdische Perspektiven*, Edited by Waltraud Herbstrith (Essen : Verlag Plöger, 1990)〕.

Cardinal Keeler : "Advisory addresses Jewish Concerns about the Canonization of Edith Stein." *Origins* (October 15, 1998 Vol. 28 : No. 18) pp. 301-304.

Koichiro Kikama : "The Reality of Sainthood in the present day : The Family Tether and the Jewish Identity in the case of Edith Stein" *Studies in Comparative Culture* No. 69 The Japan Association of Comparative Culturep. pp. 183-191, 2005.

Mclnerny, Ralph : *The Defamation of Pius XII*, St. Augustine's Press, 2001.

Marchione, Margherita : *Consensus and Controversy : Defending Pope pius XII*, Paulist Press, 2002.

Oben, Freda Mary, Ph.D. : *The Life and Thought of St. Edith Stein*, Alba House, New York, 2000.

Pope John Paul II : "Homily at Beatification Eucharist." *L'Osservatore Romano*, Weekly Edition in English, no. 20, May 18, 1987, pp. 19-20.

Phayer, Michael : *The Catholic Church and the Holocaust, 1930-1965*, Indiana University Press, 2000.

Posselt, Teresia Renata : *Edith Stein ; The Life of a Philosopher and Carmelite*, Authorized and Revised Biography by Her Prioress Sister Teresia Renata Posselt, O.C.D., Compilation and Commentaries by Susanne M. Batzdorff, Josephine Koeppel, John Sullivan in collaboration with Maria Amata Neyer, Cologne Carmel, ICS Publications Washington, D.C., 2005.

Sánchez, Josó M. : *Pius XII and the Holocaust : Understanding the Controversy*, The Catholic University of America Press, 2002.

Stein, Edith : The Collected Words of Edith Stein ; Sister Teresa Benedicta of the Cross Discalced Carmelite 1891-1942 Vol. 1, *Life in a Jewish Family ; Her Unfinished Autobiographical Account*, edited by Dr. L. Galber and Romaeus Leuven, OCD, translation by Josephine Keppel, OCD, ICS Publications, Washington, D.C., 1986.

Stein, Edith : *Edith Stein : Selected Writings : with Comments, Reminiscences and Translations of her Prayers and Poems by her Niece*, tr. by Susanne M. Batzdorff. Springfield, IL : Templegate Publishers, 1990.

Commission for Religious Relation with Jews : *WE REMEMBER : A REFLECTION ON THE SHOAR*, Vatican City, 1998.

Wardi, Dina : *Contemporary Jewish and Cristians Encounters*, A Stimulus Book, 2003.

＊本稿は，日本学術振興会から交付された平成19年度科学研究費補助金基盤研究（C）「エディット・シュタインの公開された手紙をめぐる論争の調査と文献研究」（課題番号：19520061）による研究成果の一部である。